SDGsこども演劇

『ボクとガルゴと星とたんぽぽ』

作・演出　西田征史

舞台下手には「岩の洞窟がある森」のセット。
洞窟の中は、ガルゴが隠れられる。
開演のタイミングで客電が落ちていく。

【シーン1　森の中】（夕）

暗転中に、役者が板付く。
舞台の中央にぺぺ、花の首飾りを作っている。
アンバーな照明。夕方を演出。
M1「私と小鳥と鈴と」が流れる。

ぺぺ　♪わたしが両手を　広げても　お空は　ちっとも　飛べないが
飛べる小鳥は　わたしのように　地べたを早くは走れない

上手下手から、妖精たち　登場

ぺぺ　♪わたしが体を　ゆすっても　きれいな音は出ないけど
あの鳴る鈴は　わたしように　たくさんな歌は知らないよ

上手からキイ、下手からアオ、登場。

全員　♪すずと小鳥と　それから　わたし
みんなちがって　みんないい！

妖精たちは、上手退場。ぺぺは腰を下ろす。
カラスの鳴き声ＳＥ・カーカー。

アオ「ある国のある村に」
キイ「「弱虫ぺぺ」とからかわれている男の子がいました」
アオ「今日は村の収穫祭」
キイ「そこでつける首飾りを、シロツメクサで作っているんだ」
嬉しそうに首飾りを見つめるぺぺ。
ぺぺ「出来た……」

その瞬間、ぺぺの背後で物音がする。
ＳＥ・ガサガサガサ。

ぺぺ「なんの音？」
と、洞窟に目を向ける。
アオ・キイ「おやおや」
キイ「誰かがやって来たみたい」

アオとキイの上手下手に退場。
下手の洞窟周りだけの明かりに。

ぺぺ「（立ち上がり）え、誰？　誰なの？…ねぇ、誰？！」
と、洞窟に飛び込む。

すると、舞台背景に怪物のシルエットが現れる。
「こわいＢＧＭ」スタート

洞窟から飛び出してくるぺぺ。

ペ　ペ「あ…あ…出たぁ～！ガルゴボンバ！！！」
と、首飾りを落としながら慌てて下手に逃げていく。
上手からは、シーン２の役者が供物台を押しながら
出てきてスタンバイ。

ガルゴボンバの声「ガーゴボンバ……」
下手側の照明消える。

【シーン２　村】（夕）

クロスチェンジで上手に明かりが入る。
供物台の後方にマルムの父・コロリロの母・ペペの父、
村人たち、マルムとコロリロが並び、
正面（客席方向）に祈っている。
皆、シロツメクサの首飾りをしている。
供物台の上には、たくさんのかぼちゃと酒が乗っている。

マルムの父「全ての物に宿る妖精様……」
コロリロの母「今年は沢山のかぼちゃが穫れました」
みんな「（合わせて）ありがとうございます！」
ペペの父「感謝のお酒と食べ物です。どうか」
みんな「（合わせて）おめしあがりください！」
と、同時に頭を下げる。
ここで「こわいＢＧＭ」が終わる。
音楽の終わりと同時に頭を上げる村人たち。それまでの荘厳さ
とうって変わって楽しそうな雰囲気の一同。
上手袖に去っていきながら、以下のセリフ。

マルムの父「さぁ、俺らもお祝いだ！」
ペペの父「食べて飲んで楽しもう」
大人たち「おう！」
コロリロの母「（マルムとコロリロに）子どもたちも沢山たべなさいよ！」
マルム・コロリロ「うん！（同時に「はーい」）」

上手に去っていく親たちと村人たち。
マルム「なにたべよっかなぁ」
コロリロ「(かんがえる)んー」
マルム「(きりかえて)てか、ぺぺおっせーな」
コロリロ「あぁ、お祭り始まったのに」
マルム「どうせのんびり首飾りを編んでんだろ」

そこにぺぺが下手から駆け込んでくる。

ぺぺ「たいへん！ たいへんだよ～」
コロリロ「どうしたの？」
ぺぺ「ガルゴボンバが出たの！」
マルム・コロリロ「え！？」
コロリロ「それってあのバケモノ？」
ぺぺ「そう！」
マルム「人間を食べるって噂の？」
ぺぺ「そう！」
マルム・コロリロ「(同時に)嘘だ～！」
ぺぺ「え？？？ 嘘じゃないよ」
マルム「弱虫ぺぺが、木でも見間違えたんだろ？」
コロリロ「そうだよ」
ぺぺ「ホントにいたの！」
マルム「旅人が噂してただけで、村の誰も見てないんだぞ」
コロリロ「ガルゴボンバなんていないよ」
ぺぺ「……ホントなのに……」
コロリロ「それより首飾りは？」
ぺぺ「え？ (気づき)あ、落として来ちゃった……」
マルム「何やってんだよドジ」
ぺぺ「ごめん……」
マルム「仕方ねぇ、一緒に取り行ってやる」
ぺぺ「え？」
マルム「案内しな」

照明、上手の村側落ちる。

＊この間に下手袖から骨の小道具を
下手の洞窟前に出しておく。
一瞬の暗転。
同時にSE「森の中に響く、鳥の鳴き声」が聞こえてくる。

【シーン3　洞窟がある森】（夜）

SEが聞こえる中、照明・下手サイドの森にフェードイン。
青い明かりも入れて、月明かりを表現。
上手方向（＊シーン2ラストの立ち位置）から、
辺りを探りながら下手に向かうマルム・コロリロ・ペペ。

マルム「……（不服そうに）どこに落としたんだよ」
コロリロ「（不服そうに）全然な～い」
ペ　ペ「もういいよ、これ以上行くとガルゴボンバが……」
マルム「まだ言ってんのか？」
コロリロ「そんな奴いないって」
ペ　ペ「そうかなぁ……」
その瞬間、3人は同時に何かにつまづく。
ペペ・マルム・コロリロ「わ！」
マルム「（落ちている骨を拾って）なんだ、これ？？？」
膝をついた状態のまま、拾った物に顔を寄せる3人。
マルム・コロリロ・ペペ「うわあ～！！」
マルム「骨だ！？」
ペ　ペ「ああ！　周りにいっぱいあるよ」
コロリロ「これってもしかして、「ニンゲンの骨」！？」
マルム・ペペ「ええ！？」

次の瞬間、洞窟の中から「ガァ」の微かな声と共に
ガルゴボンバが姿を現す。首が3つある、大きなバケモノ。
（3人で一匹の大きな化け物を演じる）

マルム「（その声に反応）！？　この声……」
と、振り返る3人。

背後でガルゴボンバは子どもたちをジッと見つめていた。

ぺぺ・マルム・コロリロ「（大声をあげる）ぎゃー、ガルゴボンバ！！！」

「こわいＢＧＭ」、再びスタート。

マルム「くそ！　これでも喰らえ、バカ野郎～！」

と、手にしていた骨を投げつける。

骨が当たり、「うぅ～」と雄たけびをあげる。

３つの首が順番に声を出す。その音はつながっていて、

「ガルゴボンバ」に聞こえる。

ガルゴボンバ１「ガーゴ！」

ガルゴボンバ２「ボン！」

ガルゴボンバ３「バー！！！」

そして、ガルゴボンバは手にしていた何かを

ぺぺに向けて放る。

ガルゴボンバ１・２・３「フン！」

ぺぺ・マルム・コロリロ「わ！」

マルム「攻撃してきた！」

ぺ　ぺ「うわぁ」

と、その何かを拾う。

コロリロ「誰か助けてぇ！！！」

ぺ　ぺ「誰かぁ！！！」

そこに、上手からマルムの父・コロリロの母・ぺぺの父が

銃を手にやってくる。

マルムの父「どうした！」

ぺぺの父「大丈夫か！」

親たち「（ガルゴボンバを目にして）うぉ！（等一言リアクションを

漏らす）」

マルムの父「ガルゴボンバ！？……」

マルム「(マルム父のもとにかけよる)おとうさん！」
コロリロ「(コロリロ母のもとにかけよる)ママ～！」
コロリロの母「このバケモン！ 子どもたちから離れな！」
と、発砲する。
SE「パン」。

ガルゴボンバ1・2・3「(それを受け)ガー」

ぺぺの父「ぺぺ下がれ！」
と、ぺぺに手を伸ばす。
あわててかけよるぺぺ。

ぺぺの父「あっちに行けバケモン！」
と、発砲する。SE「パン」。

ガルゴボンバ1・2・3「(それを受け)うぅぅ！」
ガルゴボンバは、親たちに牙をむき、今にも襲いかかりそうな体勢を取り恐ろしいうなり声を上げる

ガルゴボンバ1「ガーゴ！」
ガルゴボンバ2「ボン！」
ガルゴボンバ3「バー！！！」

その瞬間、悲鳴を上げるマルム。
マルム「ギャー」
と、上手袖に逃げていく。

ぺぺ・コロリロ「ひゃあ(等悲鳴)」
と、上手袖に逃げていく。

その間、親たちは、ガルゴボンバをにらんだまま。
マルムの父「くそ、銃が効かない……」

ガルゴボンバ、もう一度大きなうなり声を挙げる。
ガルゴボンバ1「ガーゴ！」
ガルゴボンバ2「ボン！」
ガルゴボンバ3「バー！！！」
と、手を大きく広げる。
親たち「うあああ」
上手に逃げて行く親たち。

ガルゴボンバのみに照明が絞られる。
ガルゴボンバは「グルルル・・・グルルル・・・」と2度小さく唸る。
下手の明かり消える。
同時に「こわいＢＧＭ」、ここでフェードアウトしていく。

【シーン4　村】(夜)

上手に明かりが入る。
ぺぺ・マルム・コロリロ・マルムの父・ぺぺの父・コロリロの母。
上手後部に供物台が残っている状況。
ここまでに一度袖に退場したぺぺたちは戻っておく。

ぺぺの父「ばかもん！　なんであんなところに！」
ぺぺ・マルム・コロリロ「(同時に)ごめんなさい！」
ぺ　ぺ「(マルム・コロリロを指しながら親たちに)僕の落とし物を探してくれてたんだよ」
マルムの父「それより大変なことになったぞ」
マルム・コロリロ・ぺぺ「え？」
マルムの父「バケモンを怒らせちまった」
コロリロの母「ああ、まさか本当にいたなんてね」
マルムの父「あの怒りっぷりじゃ村を襲ってくるかもしれねぇ」
マルム・コロリロ・ぺぺ「ええ！？」
マルムの父「こうなったらアイツを倒すしかない！
どうするかみんなで話し合おう！」
と、足早に上手袖に去っていく。

コロリロの母・ぺぺの父「ああ」
と、足早に上手袖に去っていく。
残った子どもたち。
ぺぺ・マルム・コロリロ「……」
マルム「あんなバケモン、絶対倒せないよ……」
コロリロ「ニンゲンの骨いっぱいあったもんね」
ぺ ぺ「(手にしたままのガルゴボンバに投げられた物を見つめ)あれ?……
(マルム・コロリロに)あのさ」
と、何かを告げようとする。

その瞬間、舞台上手後方に明かりが入る。
そこには冒頭から置いたままの供物台があり、その周りに
妖精たちがいてモリモリとお供物を食べている。
(以下、リーダーと1~5と表記)
＊この妖精の板付きは、シーン3の後半で親たちが
上手に逃げていくのと同時のタイミングで。

照明が後方に入ると同時に、マルムが妖精に気づき言葉
を発する。つまり、ぺぺの「あのさ」の直後にマルムの
セリフ「ねぇ」が入る。

マルム「(上手後方を見つめたまま)ねぇ、あれって……」
上手後方に目を向けるぺぺとコロリロ。
ぺぺ・コロリロ「(ハッとする)はっ」
マルム「妖精様だよな……」
ぺ ぺ「え!?」
コロリロ「お供え物を食べてるんだね」
ぺ ぺ「はじめてみた……」
マルム・コロリロ「うん」
マルム「(次の瞬間何かを思いつき)そうだ!(妖精に近づいていく)
あの~妖精さん?……」
妖精一同、動きをとめ、振りかえる。
妖精たち「ん?」
マルム「(緊張し)こんばんわ」

リーダー「(一瞬の間)……(の後)どうも～」
と、告げ、妖精たちは食事を再開する。

コロリロ「ノリが軽い……」
マルム「お願いがあるんです！ どうか、ガルゴボンバってバケモノをやっつけてください」
ぺ ぺ「え？」

ここ以降、ぺぺは言いたいことがあるが言い出せないでいる。

コロリロ「それいい！」
マルム「お願いします！」
リーダー「えー……(他の妖精に)どうする？」
妖精たち「(同時)ごしょごしょごしょ」
リーダー「うん、そうだね。……
(マルムたちにキリリと告げる)ことわる！」
コロリロ「なんでですか！？」
リーダー「メンドくさいもん」
マルム「そんなぁ～」
コロリロ「お願いしますよ！」
リーダー「(隣の妖精に)えー、どうする？」
妖精１「(隣の妖精に)どうする？」
妖精２「(隣の妖精に))どうする？」
妖精３「(隣の妖精に)どうする？」
妖精４「(隣の妖精に)どうする？」
妖精５「(隣のマルムに)どうする？」
マルム「いや聞かれても……」
コロリロ「助けてください！ 人間を食う悪い奴なんですよ！」
リーダー「そいつが襲ってきたの？」
妖精１「誰かケガした？」
マルム・コロリロ「いやぁ……」
マルム「ケガはしてないけど……」
コロリロ「でも石みたいなのこっちに投げてきました！」
マルム「そうだ！」

リーダー「それは、きみたちが何かしたからじゃないの？」
コロリロ・マルム「へ？？？」
リーダー「さんハイ！」
ここでＭ２「こだまでしょうか」がスタート。
それに合わせて妖精全員が歌う。
同時に照明・変化。

♪

全員　「あそぼう」って言うと
「あそぼう」って言う。
妖精１　「遊ぼう」

全員　「ばか」って言うと
「ばか」って言う。
リーダー「ばーか」

全員　「もうあそばない」って言うと
「あそばない」って言う。
妖精１　「あそばない！」
全員　そうして、あとでさみしくなって、
「ごめんね」って言うと
「ごめんね」って言う。
リーダー「ごめんね」

全員　こだまでしょうか、いいえ、だれでも
「あそうぼう」って言うと
「あそぼう」って言う。

リーダー＆妖精１「遊ぼう！」

全員　こだまでしょうか、いいえ、だれでも

で音楽終わる。同時に照明・戻る。

リーダー「つまり、出方によって相手の反応が変わるってこと」
妖精２「君らが何かしたから、相手がそういう反応になった」
妖精３「ってこともあるんじゃない？」
マルム「あ……俺が最初に骨投げたかも……」
コロリロ「それでバケモノが怒ったのか」
リーダー「いや、そもそも怒ってないかもよ～」
ペペ・マルム・コロリロ「へ？」
妖精４「「見えていないもの」があるんじゃない？」
マルム「「見えていないもの」？？？」
妖精５「ねぇ、お星様って、夜どこにある？」
ペペ・マルム・コロリロ「え？　空……」
妖精１「じゃあ、昼間はどこにある？」
ペ　ペ「んー」
マルム「わかんない」
妖精４「昼間でも、星は空に浮かんでいるんだ」
マルム「そうなの！？」
妖精２「そう、昼間は明るいから光が見えないだけで、
　お星様自体は、いつもあるんだよ」
ペペ・マルム・コロリロ「へぇ」
リーダー「星のように、世の中には、自分には見えていなくても、
　存在しているものっていっぱいあるのさ」

以下、実際に役者が考えた「目には見えないもの」の具体例を
１人ずつ前に出て発言していく。

妖精１「たとえば〇〇（自由に）とか」
妖精２「〇〇（自由に）とか」
妖精３「〇〇（自由に）とか」
妖精４「〇〇（自由に）とか」
妖精５「〇〇（自由に）とか」

ペ　ペ「たしかに……」
リーダー「それは相手の気持ちもそう。
　どんなことを考えているのかとか、

どんなじじょうがあるのかとか、
相手の気持ちは、自分には見えなくてわからないものだよね。
でも相手にも気持ちやじじょうがあるんだよ」
マルム・コロリロ「（受け止める）……」
マルム「あぁ（と納得したように答え、一転）なにがいいたいの？」
リーダー「（軽いズッコケ）あれ？ まだわかんない？」
コロリロ「もしかして……ガルゴボンバにもみえないものがあるのかな…」
全ての妖精たち「お！」

その時、投げられた物を見つめていたぺぺが口を開く。
ぺ ぺ「あの～……」

ぺぺに目を向けるマルム・コロリロ・妖精たち。

ぺ ぺ「実は、ガルゴボンバが投げてきたコレ、石じゃなくて、
僕がつくった首飾りだった」
マルム・コロリロ「は？（え？・等）」
ぺ ぺ「泥の中に入ってた。攻撃じゃなくて、
忘れ物を返してくれただけなのかも」

それを受けて妖精たちは同時に大きくうなずく。

コロリロ「ホラ！ 見えてないものがあったんだ！」
マルム「アイツ、恐いやつじゃなかったのか……」

そこに上手から銃を手にマルムの父・コロリロの母・
ぺぺの父が以下の台詞を言いながらやってくる。

マルムの父「おい、こどもたち、お前らはじっとしてなさい」

振り返る子どもたちと妖精。

ぺぺの父「今すぐやっつけにいくことにした！」
ぺぺ・マルム・コロリロ「え！？」

コロリロの母「スキを突かない限りあんなバケモノ倒せないからね！」
マルムの父「いくぞ！」
コロリロの母・ぺぺの父「おう！」
と、上手の奥へ走って行く。

ぺぺ・マルム・コロリロ「あ、ちょっと！（等）」
ぺ　ぺ「大変だ、ガルゴボンバを助けなきゃ！」
と、上手へ走って行く。

マルム・コロリロ「（ぺぺの凜々しい反応に戸惑いつつ）うん！」
と、ぺぺを追って下手の奥へ走って行く。
残った妖精たち、「やれやれ」という表情でポーズを取る。
上手側の照明・消える。

【シーン5　洞窟がある森】（夜）

クロスチェンジで下手の洞窟前に照明が入る。
月明りが照らす中に、ガルゴボンバの姿がある。
土を近くにまいている。

ガルゴボンバ1「（まんぞくそうに）ふぅ……」
ガルゴボンバ2・3「（やさしい顔で）つかれたぁ」

そこに、上手から、銃を構えたマルムの父・コロリロの母・ぺぺの父が駆け込んでくる。
親たち「うぉぉぉぉぉ！」
同時に照明が広がる。
ここまでに供物台を妖精役が上手袖に片付けておく。

マルムの父「いたなバケモノめ！」
コロリロの母「覚悟しろ！」
ぺぺの父「そうだ！」

一斉に銃を構える親たち。

ぺぺ父「撃てぇ！」
そこに上手から駆け込んでくる
ぺぺ・マルム・コロリロと妖精たち。
順番もこのまま。ぺぺは、息切れしてなかなか言葉を出せない。

マルム・コロリロ・ぺぺ「待って待って！」
マルムの父「何しに来た！」
コロリロの母「下がってなさい！」
マルム「ちょっと待って！」
マルムの父「下がってろ！！！」
リーダー「あー、見てらんないよ」
と、妖精一同が、同時に両手で目を隠す。

コロリコ「(大人に)ねぇ待って！「見えないものがある」って妖精さん
言ってたの、(ガルゴボンバを指し)この子の話きいてみようよ」
コロリロの母「妖精さん？」
コロリロ「うん、そこに居るじゃん」
大人たち「え？」
妖精３「大人には見えない」
マルム・コロリロ「そうなんだ」
マルム「(大人たちに)大人には見えないって」
大人たち「(キョロキョロする)え、あ……
(同時に)いつもありがとうございます！」
と、妖精がいない方向に頭を下げる。

妖精たち「こっちこっち！」
マルムの父「(姿が見えない妖精に向かい)でも邪魔しないでください、
このバケモノは悪い奴なんです！」
ぺぺの父「やっつけるしかないんだ！」
と、再びザッと銃を構える親３人。

マルムの父「撃てぇ！！！」

その瞬間、ぺぺが大人とガルゴボンバの間に割って入る。

ぺ　ぺ「やめてぇ！」
親たちとマルム・コロリロ「（ハッとする）あ！」
親たち「（同時に）危ない！」
ぺぺの父「ぺぺ離れろ！」

動じず、その態勢のままのぺぺ。

ぺ　ぺ「……（ガルゴボンバに）こわがらせちゃってごめんね……」
ぺぺの父「何してるんだぺぺ！　こっちに来い！」
マルムの父・コロリロの母「そうだ！」
ぺ　ぺ「いやだ！　……絶対動かない！！！！」
マルム「（その勇敢な姿に胸打たれ）ぺぺ……」
ぺ　ぺ「ねぇ……（とガルゴボンバに顔を向ける）
どうして君は、土をまいてるの？」
ここで「やさしいＢＧＭ」が流れ始める。

ガルゴ１「ああ……森で死んだ生き物たちを弔いながら、土に返してる」
コロリロ「だから骨があったのか……」
コロリロの母「なんでそんなこと」
ガルゴ２「死んだ動物の体は、土に埋めると、
木や植物の栄養になって役に立つから……」
ガルゴ３「死んで何かの役に立ってると思えば、
死んじゃった動物も喜ぶと思って……」
親と子どもたち「（その優しさに驚き）……」
妖精５「この村にもその土をまいてくれたから、
おいしいカボチャが沢山出来たんだよ」
ぺぺ・マルム・コロリロ「そうなの？」
親たち「（妖精と話す子どもたちに）ん？？？」
コロリロ「（親たちに説明）村にこの土をまいてたから、
かぼちゃがいっぱい出来たんだって」
マルムの父・ぺぺの父「なに！？」
コロリロの母「そうだったの……」
ガルゴボンバを見つめる親たち。

ペ　ペ「ホラ、ちっとも怖くないし、悪い奴なんかじゃないんだよ」
マルムの父「恩人に銃を向けていたのか……すまない」
ペペの父「悪かった」
親たち「ごめんなさい」
ガルゴボンバ1「……もういいよ、気にするな…」
ガルゴボンバ2・3「うん」

親たち、ばつが悪そうに上手後方に去る。
立ち去る姿を見て
ペペ・マルム・コロリロ「あー、よかった…！」
ペペ、ガルゴの下手に回り込み、
ペペ「(ガルゴボンバに)ごめんね」

ガルゴボンバ1「別にいいんだ…銃を向けられるなんて、よくあることだから」
一同「え？」
ガルゴボンバ2「こんな姿だから、いつも怖がられて、友達が出来なくてさ
……」
一　同「……」
ペ　ペ「じゃあ友達になろう？」
ガルゴボンバ1・2・3「え？」
ペ　ペ「この首飾り、君にあげる」
と、ガルゴボンバ1に首飾りをかける。
コロリロ「ぼくも！」
と、ガルゴボンバ2に首飾りをかける。
マルム「俺も！」
と、ガルゴボンバ3に首飾りをかける。
ガルゴボンバ1・2・3「ありがとう。うれしいよ」
笑顔の子どもたち。
妖精たちはパチパチと拍手する。
マルム「ホント、見えてないものってあるんだな」
コロリロ「ね」
ペ　ペ「ガルゴボンバがこんなに優しかったなんてね」

マルム「それもだけどお前のことも」
ペ ペ「へ？」
マルム「こんなに一緒にいたのに、「ぺぺがいざとなったら勇敢だってこと」
知らなかった」
コロリロ「うん！」
ペ ペ「へへ（と照れ臭そうに笑う）」
ガルゴボンバ１「（ぺぺに）僕を守ってくれてありがとうね」
ペ ペ「（照れくさそうに）いえいえ」
嬉しそうなぺぺ。
「やさしいＢＧＭ」フェードアウト。

ペ ペ「そうそう！（とガルゴボンバに目を向け）気になってたんだけど、
君が叫ぶ「ガルゴボンバ」ってどういう意味？」
ガルゴボンバ１・２・３「ああ」
ガルゴボンバ１「僕が生まれた場所の言葉でね」
ガルゴボンバ２「『なかよくしよう』」
ガルゴボンバ３「って意味」
妖精も含めた全員「へぇ～」
と、皆が満面の笑みを浮かべる。

クロスで上手と下手にサス。
そこにはアオとキイが立っている。

キ イ「さ、ものがたりはこれでおしまい」
ア オ「みんなの周りにも、見えないけれど、
たしかにあるものがいっぱいあるよ」
キ イ「見えないものって、実は大切なものが多いんだ。
君も探してみてね」
ア オ「それではさいごに、みんなでうたおう」
キ イ「星とたんぽぽ」

このセリフの裏で、歌のフォーメーションになる。
照明が切り替わり、全キャストで「星とたんぽぽ」を歌う。
Ｍ３「星とたんぽぽ」スタート。

♪

アオ　青いお空のそこふかく、海の小石のそのように

ガルゴボンバ1・2・3　夜がくるまでしずんでる、昼のお星はめにみえぬ。

全員　見えぬけれどもあるるんだよ、見えぬものでもあるるんだよ。

キイ　ちってすがれたたんぽぽの、かわらのすきに、だァまって、

ぺぺ・マルム・コロリロ　春のくるまで隠れてる、つよいその根はめにみえぬ。

全員　見えぬけれどもあるるんだよ、見えぬものでもあるるんだよ。

全員　見えぬけれどもあるるんだよ、見えぬものでもあるるんだよ。

全員　見えぬけれどもあるるんだよ、見えぬものでもあるるんだよ。

【完】